

岩沼市文化財だより



文化財愛護シンボルマーク

第8号

平成21年3月31日発行

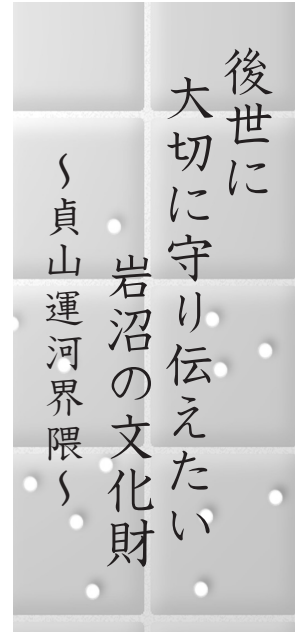
岩沼市教育委員会

TEL 0223-22-1111

岩沼市桜1-6-20



↑ 貞山運河の風景(須賀原近辺)



↑ 『街道をゆく』で紹介されたスケッチの地点(新浜橋付近)



↑ 五間堀川と貞山運河の合流地点

時折、貞山運河が話題にのぼります。運河に新たな付加価値を見出すという動きなのでしょう。

運河の呼称は人工を意味します。往年、名称は「木曳(挽)堀」(きびき・こびき)とも言われ、明治になつて伊達政宗に因んで「貞山」と命名された由縁はよく知られていることです。

昭和六十年二月二十五日夕方、作家・司馬遼太郎氏がこの地(蒲崎)を訪れ「これほどの美しさでいまなお保たれていることに、この県への畏敬を持った」と著作の『街道をゆく・二十六巻』で紹介しています。すでに開発によって姿は変わっているものと予想していたのでしょうか。

この運河の役割は、イカダによる木材、船による物資の輸送が第一に挙げられ、排水路にも使われました。舟運は車社会に至るまで続きました。往時を偲べば、船は浅瀬のため堤防の上から人力で移動させていたといえます。

海岸線に平行して築かれた運河は、輸送以外に、津波の緩衝地としての役割はなかったのか、歴史的な経験を踏まえた当時の土木技術の考え方に、津波対策の発想が潜んでいたかもしれません。

この運河を政宗の命によって整備にあたった川村孫兵衛は、赴任地を早股におき、屋敷を構えたという研究者がいます。となれば、地名として現存する早股地区の孫目(まごめ)の名称が気になります。

岩沼のお土産

岩沼市文化財保護委員長 千葉 宗久

土産(みやげ)とは、「旅先で求め
帰りに贈る、その土地の産物」で、
土産話と土産物があると『広辞苑』
に記されている。

現在、岩沼のお土産と言えばお菓
子やお酒、奈良漬けなど数多いが、
かつて岩沼にあったが今はなくなっ
てしまったお土産のいくつかを紹介
したい。

都の苞

苞(つと)とは「わら等を束ねて物
を包んだもの」というのが本来の意
味であるが、お土産という解釈もあ
る。

『都の苞』というのは南北朝時代
に諸国を旅行した宗久法師が著した、
都へのお土産話とも言える書物であ
る。この宗久法師は観応年間(一三
五〇〜一三五二)に古の歌人が訪ね
歩いた名所古跡をたどり、岩沼では
「東平王の松」の歌を詠み、「武隈の
松」の陰で旅寝している。

南長谷地区の千貫神社前の前方後
円墳「東平王塚古墳」の墳丘上にあっ
た松は、昭和三年秋に枯れて倒伏し
てしまった。時代からして宗久法師
が目にしたのはこの松ではなかった
と思うが、歌に詠まれるほどである
から、かつての松もさぞかし立派な
松であったと想像される。

東平王(または恵美朝猫という説
もある)なる人物がこの地で客死し、
ここに葬られたが、死後も故郷が恋

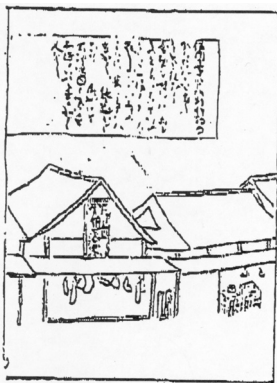
しくて、その塚の上に植えられた松
の枝葉は西方にたなびいていると宗
久法師は『都の苞』に記しており、
「ふる郷は げに いかなれば 夢
となる 後さえ猶も忘れざるらん」
の歌を詠んでいる。

飴と膏葉

飴と膏葉はともに江戸時代から岩
沼の名物であり、お土産として喜ば
れたものである。『仙台名物見立』
の「封内一づくし」に「飴は岩沼、
膏葉は一文膏」が記されていると、
『続岩沼物語』の中に佐々木氏は述
べている。

さらに、名物飴は二枚の薄美濃紙
にはさみ、黒砂糖の飴を六個張り並
べたもので、紙を舐めはがして食べ
るものであったそうである。紙が高
くなつたことや不衛生とケチがつい
たことから今は売ってないところの
で、名物飴は昭和初期まで出回って
いたかも知れない。

一文膏は無銭膏葉とも称されたも
ので、竹駒神社の初祭り等にお土産
物として大変評判だったそうである。
佐々木氏によると、無銭膏葉屋の店
舗は『奥州名所図会』にも描かれ
ており、店頭に沢山の瓢箪をぶら下
げた図と売り子の口上まで記されて
いると述べている。



無銭膏葉屋
(「奥州名所図会」より)

『仙台風俗志』にも、膏葉売りの
無銭徳兵衛なる人
物が広く
世間に知
られてい
た事が記
載されて
いる。



膏葉売り(滝沢新三郎)
(「仙台風俗志」より)

エナリあんもづ、おスス、べんとう
かつて岩沼駅前の水戸屋さんには、
旅館業だけでなく汽車の乗客を相手
に饅頭を始めとして「稲荷あんもち」
や寿司、弁当、アイスクリーム、ア
イスキャンデーなどを売っていた。
明治二十九年のお生まれの水戸つ
るよさんのお父さんは、汽車待ちお
客さん相手にあん餅を販売したところ、
これが当たってよく売れ、大変
な評判になったという。

また、寿司を売り出したのはつる
よさんが十歳の頃というから、明治
三十九年の頃であろう。弁当の開始
は彼女が東華女学校時代の明治四十
七年の頃と思われる。

アイスクリームやアイスキャンデー
の売り出しは、昭和になつてからの
話だという。

太平洋戦争後も駅弁などの販売は
続いていたが、汽車の停車時間が短
縮され弁当類の売上が落ちてきて、
昭和三十八年に駅売りは廃業になっ
たそうである。

まとめ

現在デパートに行けば全国の名物
を買うことが出来る時代であるが、



「稲荷あんもち」の包装紙
(昭和15年)



「御弁当」の包装紙
(昭和20年~30年代)



「御寿司」の包装紙
(昭和20年~30年代)



「はらめし鮭」の包装紙
(昭和20年~30年代)

旅人の心が伝わるお土産物やお土
産話は嬉しいものである。

引用参考文献

- 鈴木雨香：『都の苞』(仙台叢書 第二巻)
- 佐々木喜一郎：『東平王の塚』(岩沼物語)
- 佐々木喜一郎：『十三香具師のこと』(岩沼物語)
- 佐々木喜一郎：『岩沼の名物』(続岩沼物語)
- 水戸つるよ：『駅弁盛衰記』(蛭雪百年)
- 岩沼小学校創立百年記念誌
- 岩沼市史
- 千葉宗久：『停車場開業と駅前』(いわぬま歴史散歩)一三四
- 千葉宗久：『雨香先生と仙台風俗志』(いわぬま歴史散歩)四七
- 名取教育会：『口碑伝説』(名取郡誌)
- 林順信：『諸国土産大図鑑』(旅)

鵜ヶ崎神社(仁岩社)について

岩沼市文化財保護委員 阿部 昭平

先般、古内家第十五代広直氏の甥北山氏が岩沼を離れるのにあたり、『古内家関係の皆様に御報告』と『仁岩社由緒』の文書を託された。その中身を一部紹介しながら、岩沼古内家と鵜ヶ崎神社(仁岩社)の建造と変遷について、昔を偲びながら、其の経過を知って頂きたく、筆をとった次第である。

『古内家関係の皆様に御報告』

廃藩置県となつてから、明治二十八年祖父古内広行が旧鵜ヶ崎城跡の一隅に先祖古内主膳重広を神体として、鵜ヶ崎神社を創建し主膳の供養



仁岩社(大日堂)

と古内家の守護鎮守をはかつてきたが、国家大変の経過と共に其の行事は賑わいを失いその将来の存続さえ案ぜられておりました。

ところで、私の子供達三人は東京以西に家を持ち生まれ故郷に戻つて来る望みはなく、今のところ甥の北山雄彦が私の代理を勤めており助かつておる次第です。然しながら個人として持続をはかることは無理です。最後に到達したのが北長谷大日堂住職山下政亀師にご相談申し上げたところ師の霊場境内に遷宮することになった次第です。

昭和五十八年六月 古内広直

『仁岩社由緒』

仁岩社は、岩沼古内家の初代であつた主膳重廣君を祀る。

重廣君は、伊達氏第十五世左京大夫陸奥探題晴宗公の末男で国分家を継いだ彦九郎盛重の第四子として仙台の小泉城(古城)に生まれた。

七歳の時、小泉城は伊達政宗公に攻め落とされ、国分一族は水戸の佐竹氏を頼つて落ち延びたが、君は家臣の背に乗り一旦近くの国分寺に難を避け、次いで国分家の一門で重臣であつた根白石の古内實綱に身を寄せ、やがてその養子となつた。

国分家滅亡後は、浪々の身の古内家の生活も困窮し、山の薪を採つて仙台城下に売りに行き、糧を得ていたという。十歳を過ぎてからは、養父の訓に厳しく従つて武道に精進、殊に馬術を達人葛西紀伊に学び、弱

冠十七・八歳で名声を四隣に轟かせ、この事が藩主政宗公の耳にも達し、二十歳の時、扶持方四人分切米二兩で召され、御馬乗りとなり、忠宗公に付けられたという。

その後は、武士の修行も怠らず、内藤以貫に師事し、武術や儒学に励んだという。大坂夏の陣には、忠宗公の使者として政宗公の許に遣わされたが、進んで戦闘に加わり手柄をたて、その場で加増されたという。

こうした戦国武士としての心意気に溢れる他面、経世済民にも深く意を注ぎ、築館近辺の荒地地を見事に開拓開田するなど、その功績や徳望は永く良民から慕われた。

文武経世の各面に秀で、且つ亦、松島瑞巖寺中興の高僧雲居禅師の導きで深く禅門に帰依し、道心堅固で士道を特に重んじ礼信に篤く、常に正道に忠誠を尽くし明暦三年、封祿を二分して孫家督重安と嫡子造酒祐に譲り隠居した。忠宗公嗣子として入国の時に岩沼を領し、奉行職となつてから二十二年目であつた。その間仙台藩政を補佐し、盤石の安きに導いた功績は誠に大きい。

万治元年七月に、主君忠宗公卒するや直ちに殉死、七十年にわたる生涯を閉じた。

明治二十八年、古内家第十三世、廣行、始祖の懿徳を偲び、社を旧城跡に建て「鵜ヶ崎神社」と号した。

祠号は、重廣君の請いに因つて松島瑞巖寺中興の高僧、雲居禅師より授与された法名に拠り仁岩社と号し

古内家及び旧領内の鎮守と為した。

以上、二通の書状を紹介したが、鵜ヶ崎神社は、栄町一丁目の鵜ヶ崎公園にあつたが、第十五代の古内広直氏が岩沼を離れるにあたり、昭和五十八年北長谷常寿院(大日堂)に移され、今は大日堂に於いて、毎年五月五日の例祭を行っているというところである。



旧仁岩社跡(鵜ヶ崎公園)

※注

- ・北山氏は広直氏の妹の嫁ぎ先北山雄三氏の子息(今は東京)
- ・懿徳とは、美しく秀でた徳
- ・重廣氏の法名は景蕭院殿仁巖総徳居士
- ・北長谷常寿院(大日堂)に鵜ヶ崎神社遷宮
- ・古内広直氏は、町村合併後の岩沼町長、市長として活躍。
- ・参考 『仙台藩家臣録(第一巻)』

岩沼水物語 第二章 荒井堤について

岩沼市文化財保護委員 作間 克彦

今回荒井堤を取り上げると予告したときに、紙幅の関係でその理由をあまり詳しく述べないでしまったが、ここでまずそのことについて二、三まとめておきたいと思う。

一つは、朝日山公園の駐車場の一角にある噴水の水がどこから来ているのだろうかということである。噴水のある場所は荒井堤よりもはるか高く(約八メートル位)、周辺には水路もない。もつともこのことについては、市役所の都市計画課公園緑地係(以下公園係と略す)の菊地さんにお聞きしたら、堤からモーターで汲み上げていたのを知ってすぐにその疑問はとけたのだが……

二つ目は、荒井堤のあの豊富な水は一体どのように蓄えられているのかということである。春夏秋冬を通して多少の増減はあるが、いつも豊富に存在し潤れることがないのは何故かということである。始めに私が考えたのは、堤のどこかに湧き水があつてそれで潤れることがないのだろうかということであつた。ところが私の仮定は見事にはずれた。公園係の菊地さんによると、周囲の山から自然に流れ込み常時一定の水量が蓄えられているということであつた。最近堤の水が汚れてきているので、水質浄化のため東南アジア原産の水草(空心菜、エンサイともいう)を筏の上に浮かべて堤の水の浄化に役立つかどうかの実験をした。平成十七年から平成十九年にかけて水上に筏を二基ずつ設置してその経過を観察したが、うまくいかなかったそうである。水草の根の部分が汚染物質を吸収してくれるはずだつたのだが、

堤に放流されている鯉などに根を食べられてしまったのでうまくいかず、実験は取りやめになったということであつた。

三つ目は、荒井堤はいつからあつて、今日までどのような変遷をたどってきたのかということである。このことが、今回の大きなテーマということになるのであるが、いろいろ調べてみても荒井堤については資料も少ないし、書いてある本もほんの数行という事が少なくなかつた。江戸時代の絵図を見ても、荒井堤と思われる沼地がでてくるのだが、これについて書かれたものはない。そこで町の古老や地元の人にいろいろ聞いて見る事から始めたのだが、それでも順調には調べが進まず難航した。町の人に聞いても最近のことはある程度分かつて、少し古いことになるとよく分からない。荒井堤については結局現時点ではあまりよく分からないことが多いというのが真相である。そこでここでは、いろいろの人達から聞いて分かつた事を中心にまとめておきたいと考える。

まず現在のよう整備される前の朝日地区について、元市会議員の伊藤さんにお聞きしたら、明治時代には住んでいた人も少なく(戸数が数十軒で人口も三百五十人程度)、雑木林からなる山と畑が混在する小さな部落だつたそうである。その当時の荒井堤は雑木林の中にあつたようである。その後、古内町長の時代に西地区の開発が必要になって、当時から開発用地として買収をしたという事である。朝日地区の開発がこのあたりから少しずつ始まっていく。

また別な方から荒井堤がかつては農業用水としても使われていたという話を聞いたが、最近になって興味深い事実を知つた。以下主として朝

日行政区長の太友博文さんのお話による。荒井堤の傍らの高台(公園の入り口)に雷神社と呼ばれている小さな祠がある。朝日地区の人たちが水の神をまつた所だそうだが、そこに今ではよく読めなくなつてしまつたけれども石碑が残されている。幕末の慶応年間(元々二年)から明治に入つても凶作が続いた。このため扶持ばなれをした侍までが帰農して田畑づくりに専念したそうである。そこで荒蕪地の開墾があちこちで行われた。そのあたりの顛末を詳しく記したのが、先にあげた記念の石碑である。これは大正十四年四月十五日に建立された。その内容は、「朝日区家福講」の由来やこの地区の開墾に尽力した伊藤左治兵衛氏と長田金左エ門氏の功績をたたえたものである。いろいろ調べてみると、その後「朝日区家福講」と現在も残る「御福殿講」は別なものであると考える

朝日区家福講略序記念碑

古内省三郎題額

当町我が朝日区民は、曾て備考貯蓄の要を深く感じ吾等同志は大に之を憂慮し、是れに対する計画をなしつゝ、ありましたに果然文久二年春旧領主古内家の領地荒井田無田六段歩の開墾耕作を同志に依託せられり。因て当区壯年総代伊藤左治兵衛 長田金石エ門両君は当時者として之れに従事し、明治四年迄継続し来れり。亦明治四年更に古内家に於て北谷地新開墾の計画をなせしも、明治四年の大旱魃に逢いその目的を達すること難きに果り、此時に當り古内家より又伊藤、長田二氏に懇囑せらる。二氏は同志と協力しつゝ治水の方法を考究、同年七月、六郷番水に稲荷山の水利を利用し、以て旱害の難を免るる事を得て、爾來耕作の好果を見るに至り、古内家より六反歩の耕田を下附せられ、復同志相謀り明治二

井堤が農業用水として使用されたのではないかと推察される。この際堤のどこから取水していたか、はつきりしたことは分からないが、現在の堤の形が工事によつて大きく変わったとしても、今の地形の高低差から考えると、堤のほぼ北側(現在堤のあふれた水が流れている土手の方角)のどこかの部分から水を流していたと思われる。地形的にみて、他の方角の可能性は低い。現在は灌漑用水として使用されていないので、以上のことはあくまでも今の地形からみて考えられることで、推測の域を出ない。

十六年古六反歩の内四反歩を売却し其金の利権を計り明治二十六年より同三十年に至る。此年更に玉浦村字林に於て、原野老反式歌歩、田參歌歩を買入れ、同年大同同志を募り朝日家福講と名稱し夫の発展を計り、同参拾老年田參歌歩、畑四畝二十一歩同参拾式年田六畝五歩、同参歌歩、畑六畝十一歩同参歌二十四歩を買入れ以て講の基礎を作れり。殊に将来を考慮し、屋根葺草の必要を感じ、玉浦村菊地新左エ門氏に懇請の上、交換地畑八畝二十四歩を得て葦植地となせり。爾來同志子孫其恩恵に浴するに至れり。

是れ憲に旧領 古内家の恩典及び伊藤左治兵衛 長田金石エ門二氏の自化を利潤せる偉大なる尽力実 に銘謝に不堪、茲に家福講の由来を略序すると共に 両氏の功績を永久に表彰する者也。

故名譽議員法常沙門大秀誌
法常現任沙門大隆謹書
大正十四年四月十五日

家福講員一同建立之

記念碑の碑文(太友博文氏作成資料)

下野郷・長塚に残る家族墓

岩沼市文化財保護委員 吉岡 一男

岩沼市街地中心部から東へ約三キロほどの地にこの家族墓は存在する。近くに真言宗岩誓寺があり、高橋照雄氏の宅地前の墓地が現存している。この家族墓、通称屋敷墓については、数年前からその存在は確認していたが、何も気にもとめずにこのあたりを歩いていたことを思い出して、いざれ近い将来に代々墓に整理統合されるのではないかと危惧をいだいたので、今回これを取上げた次第である。

この長塚あたりは、かつて玉浦村であり、藩政期には下野郷邑といわれた。下野郷は別名下之郷であり、本之郷に対して低地であつて、かつ本之郷（名取市本郷）あたりの人々が移住した開墾地であると推察される。これは岩誓寺の本寺が植松の弘誓寺であることから理解されよう。さて、小規模ながらもここに残る家族墓を紹介してみたい。

この墓碑群を数えてみると五十五基ほどが確認された。いまは雑然と墓が残され、なかには倒れて土中に埋没している例も見られ、このあたりは地震その他で土地が軟弱なところに石の重みで陥没するということがあるのか。

さて、この墓のあるじは誰なのであるか。悉皆調査は不十分であるが、代表的な五基を丹念に刻字などを見

たものを紹介する。

一、映芳軒積教貫寿量大法居士

高橋先生称俊亮号東々庵学
齋西工書弟子衆矣明治六年癸酉六月拜命為下野郷邑

小学校教員同甲戌十一月十日

(正面) 二日没寿六十二 只野克明撰

(裏面) 門 弟 中

(左面)

二、仙寿軒積了廣榮繁居士

天保三年壬辰十月
高橋平八 寿六十有三

三、栄寿軒積快楽大安居士

嘉永七年甲寅歲
閏七月十三日

四、寿量院積祐山居士

高橋助六 行年七十六歲
文政十三年寅年十一月六日

五、積大心軒諦念知恩大與居士

積法心軒妙真寿量大姉
明治十年刃歲十二月初五日
高橋彦三郎 享年六十一歲

これら代表的墓碑を五基紹介したのは、比較的その他の墓よりは大きく、明瞭に刻字が確認できたからである。そのうち、一については竿石縦五十八センチ、横四十七センチ、上台石縦十三センチ、横五十五センチ、下台石縦十五センチ、横六十七

ンチほどを計ってみた。重量は計ることはできなかったが、この墓碑群中で最も大きいものであった。これから要約してこの家族墓を考察してみると、墓石はほとんどが粘板岩であり、一部に御影石があった程度で、多くは志賀方面から運ばれたものと思われる。



墓碑群中の一基(高橋先生供養碑)

ここに眠っている先人たちは、文政あたりから明治初期までの方々で、このあたりの矢の目足軽の分流とも推察されるが、その出自は不明で、このあたりに高橋姓が多く本家筋とも思われ、苗字がついていることから土族であったと推論される。とくに高橋俊亮は下野郷小学校初期の教員をつとめ、門弟が墓をつくって供養していることも判明した。

また法名などに「積」がついていることから真宗系の僧侶によつてつ



墓碑群

けられたのではないかと推察される。いずれにしても、ここにある墓碑群だけですべてを理解することはできないが、高橋本家がここから三十年ほど前に移動して、ここ二十年ほどはほとんど供養に訪れないことから地区の人々も不明なまま家族墓だけが残されてしまった。

かつては農村部などに一般的に見られた家族墓も代々墓として寺院に統合され、岩沼市内でも志賀などごく一部にしか残されていない。改田事業でもこれが統合され、昔日の風景は徐々に見られなくなった。

おわりに、この家族墓(屋敷墓)は文政から明治初期に集中しており、このあたりの人々の生きざまを今に伝えてくれる遺産なのである。なお、この墓地などを管理されているのは、同じ長塚の高橋忠一氏である。

將軍の馬と仙台藩

その一

岩沼市文化財保護委員 森田 恵美子

はじめに

昨秋、久しぶりに竹駒神社境内にある馬事博物館に足を運んだ。展示物に竹駒神社の航空写真がある。それを見ながら、伊達氏の藩政下、仙台国分町とならぶ「大馬市」が立った所を想像した。写真からは明治以後、馬市の跡地につくられた「検馬場」の範囲を想定することができたが、『岩沼市史』に書かれていることや郷土史家に教えてもらったことをあわせると、藩政期の馬市の場は検馬場より少し小さかったらしい。

公儀馬買衆

『伊達治家記録』には「公儀馬買衆」とよばれる江戸幕府の馬買人の活動が記録されている。軍事力の重要な要素となる馬の確保は幕府の重要案件であった。幕府には直営の牧もあるが、良い馬を確保するにはそれだけで足りなかった。後述するが、「馬買衆」というのは、將軍の乗馬用の馬（御召馬）をととのえる馬買いであったらしい。だから、馬買衆による馬買いが幕府による陸奥での馬買いのすべてとは言いきれない。しかし、今回は馬買衆による仙台藩での馬買いのことに限定して触れていくつもりである。これら馬買衆が仙台藩に到着するのはほとんど冬にはいつてからで、ときには年末・年明けということもあった。そして帰府するのは、二月初めということもあったが、ほとんどは十一月下旬から十二月である。これは岩沼の馬市の市日と時期がずれているということである。かれらが

御召馬をもとめて岩沼に来たことはなかつたのだろうか。岩沼だけではない。国分馬市も三迫馬市も、とにかく藩内の馬市のどれとも時期がずれている。だが、馬買衆はしかるべき数の馬を手にいれ仙台を去る。ならば、いったいどんな方法で馬を買えばつめたのか。その探索を続けるうちに色々なことを知った。諏訪部文九郎という人物、国分馬市の役割、古馬喰という役職などなど。

政宗時代の御馬買衆

馬買衆は元和四年（一六一八）に始まったといわれている。大坂の役によって豊臣氏を滅ぼし、徳川氏はその地位を不動のものにしたこの期、はじめて馬産地へ馬買衆が発せられたらしい。馬産地は陸奥だけではなすが、やはり良馬の産地として陸奥はこのほか重要であった。

さてその元和四年、仙台藩にも馬買衆が下向し、おそくとも九月二十四日には仙台に到着している。このあと政宗が内藤正主という人物（当時内藤三家といわれた内藤家の一員だろう）にこんな手紙をおくっている。「南部から登ってきた御馬買衆から貴殿の馬を一・二匹預けられた。これからどうしたらよいか。今は散々の馬だが、大事に飼うのがよいだろう。」記事はこれだけであるが、馬買衆が南部経由で来たこと、將軍用以外の頼まれた馬も買っていたことがわかる。まだおおらかな段階の馬買いだっただけを感じる。さらに寛永八年（一六三一）十月六日に政宗が西曲輪で饗応した二人の人物は、名前から馬買衆であることがわかる。下向する馬買人は年によつて変わるが、どの人物も一度きりということはほとんどない。もう一回、寛永十一年（一六三四）十一月十八日、「この日御馬御用として渥美九郎兵衛殿、加藤卯三郎殿が仙

台へ下着された」とある。政宗時代、馬買衆が確認できるのは以上三回であるが、三回のみだったとは思われない。記録されていないだけでもつと来ていたはずである。馬買衆はいつも二人一組で下向する。かれらは幕府の「御馬方」で、禄の少ない下級幕臣であるが馬の専門家。馬の選別もでき、馬術にも長じていた。この時期の馬の買付けの実態はなにもわからない。仙台での滞在日数さえわからない。

忠宗時代の御馬買衆

寛永十三年（一六三六）政宗が江戸で死去し、忠宗が二代藩主になった。政宗はそのカリスマ性によって藩政を運営したところが多いが、忠宗は機構や制度の整備につとめた藩主であった。それと関係があるのだろうが、翌寛永十四年、国分町に七月二十日よりの馬市をもうけている。のちにいう秋市である。国分町はほんらい木の下・国分寺周辺を拠点にしていた馬喰や伝馬衆が移住した所であり、城下の建設とほぼ同時に伝馬町として町割りされた。となりの二日町は早くから旅宿の整備がすすめられた所である。城下に馬市を設けるとすればここが最適といえる場所であった。

馬買衆の下向の記事はほぼ毎年みられるようになり、馬買衆の経路や仙台での滞在日数がわかるようになる。馬買衆は奥州街道をくだり、宮から柴田郡川崎宿にはいった。そこに一泊し、山形の最上地方にぬけた。それから二ヶ月前後経過したころ、盛岡藩から仙台領にはいり、古川か、吉岡に宿泊し仙台に到着した。この間の、すなわち秋田藩や盛岡藩での馬買いの概略は渡辺信夫氏の『みちのく街道史』で知ることができる。仙台での滞在はだいたい二十数日、正月をはさんで一ヶ月をはるかに越

えてしまったこともある。仙台藩の御用始めは一月十一日だった。農民さえも正月十日間はお休みだった。ということでも、馬買衆もその間は仕事ができない。仕事の空白を余儀なくされて長期滞在することになった。一日、寛永十九年（一六四二）一月五日、古川から仙台に到着した馬買衆黒沢木工はその足で鎌先温泉に出発している。どうせ一月十一日までには仕事にならないと腹をくくって温泉に浸かりにいったと想像する。とおもしろい。

もう一つ、おもしろいことがある。

古内重広邸（当時重広は岩沼要害の館主であったが、この場合岩沼ではなく仙台の邸）で馬買衆を饗応することがあった。すると藩主忠宗が密かに古内邸をおとすれ、この饗応に知られているように古内重広はよく知っていた。忠宗も馬術に長じていた。藩主がお忍びでこの饗応にくわいたのは、重広が忠宗の寵臣だったからだけでなく、かれらの「馬談義」にまぎりたかつたからだろう。こうした記事が五ヶ所もみられる。

万治元年（一六五八）初秋、忠宗が六十歳で死去し三代綱宗が十九歳で襲封した。綱宗は在職二年一ヶ月余にすぎず、馬買衆にかんする記事も、万治二年十一月六日「お城において御馬買衆へお茶を饗せらる」とみえるだけである。

綱宗についてはこんな記事もある。かれがまだ嗣君のとき、古内重広にねだつて馬を二匹もらった。そして「いずれも見事な馬で、ありがたくしあわせにおもう」と礼状を書いて

いる。今回はここでとめ、次回は四代綱村時代の御馬買とその中止、それともなつて明らかになる馬買の手順なども書きたいと思つている。

岩沼の遺跡・その2

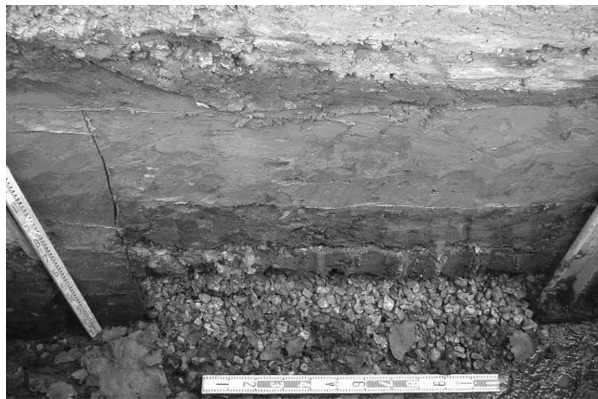
長徳寺前遺跡

生涯学習課

長岡字塚腰には曹洞宗の長徳寺というお寺があります。長徳寺の山号は龍谷山であり、一五六七年に虚応法積和尚という人物によって開かれました。

平成十五年二月二十一日に、このお寺の前を走る道路で農業集落排水工事が行われていたところ、約一・五m下の地中から文字を書いたたくさん的小石が出土した、との連絡が教育委員会に寄せられました。現地を確認したところ、これらはすべて墨によって書かれた文字であることが分かり、中には「經」「佛」「善」などの仏教で使用する経典でよく見られる文字が多く含まれていることから、これらは礫石経塚、または一字一石経塚と呼ばれる遺跡であるということが分かりました。さらに工事中にもうひとつ同じような遺構が発見され、最初に発見したものを1号経塚、後から発見したものを2号経塚と名付けました。この二基の礫石経塚は約四・五mという近接した場所での発見であり、全国的にも珍しい事例となっています。

1号経塚は工事をされていた方の話によると、ほぼ円形状の広がりをもって出土したということで、直径一・四m、深さ一・三mの円形の穴を掘り、その穴の底に厚さ四〇cmに渡って礫石経を敷き詰めたと考えられます。そしてその上からは腐食したワラのような物質が認められたことから、礫石経を埋納した後にムシ口などを被せたと考えられています。



1号経塚の発見状況

また1号経塚からはこのほかに「一之巻 □□之内」と記された木簡と、九州の佐賀県唐津市周辺で作られた陶器鉢片が出土しています。

2号経塚では西側の一边が確認できたことから一・〇mの方形の穴と推定されています。こちらは一・一五mの深さの穴に、約六〇cmに渡って礫石経が敷き詰められ、その上では1号経塚同様に腐食したワラのような物質が認められています。

1号経塚から発見された小石は一四、八九七点であり、このうちの一〇、〇八九点に文字が書かれています。書かれた文字の種類は九〇五字を数え、最も多いものとしては「佛」が二七四点、「諸」が一八七点、「是」が一八五点となっています。

2号経塚から発見された小石は一、四七九点であり、このうちの六、三二九点に文字が書かれています。書かれた文字の種類は四五六字を数え、最も多いものとしては「不」が一六二点、「善」が一四六点、「現」



2号経塚出土の礫石経

一、四四〇点となっています。1号・2号経塚から出土した礫石経の文字をすべて調査した結果、これらは妙法蓮華経という経典の中でも特定の部分を何度も書き写した可能性が考えられています。またそれぞれの経塚の造られた年代については、1号経塚では出土した陶器片から一七世紀後半頃、2号経塚は付近に存在する石碑から一八二四年と推定されています。

礫石経塚は中世から近代にかけて造られています。全国的に増加するのは江戸時代とされており、また様々な願いを込めて造られています。この長徳寺前遺跡から出土した礫石経は現時点では宮城県で最多の資料数であり、また当時の人々の信仰心の篤さを考える上で貴重な資料となっています。

引用参考文献

岩沼市教育委員会二〇〇五『長徳寺前遺跡』岩沼市文化財調査報告書第五集



1号経塚出土木簡

平成二十年
文化財めぐり報告

晴天に恵まれた十一月十一日(火)に、岩沼市文化財めぐりを開催しました。今回は、市民三十四名の方々と涌谷町内と美里町の文化財を見学しました。

当日は、市文化財保護委員の阿部昭平先生をガイド役に、籠峯寺を初めとし七箇所ほど見学しました。特に籠峯寺の愛嬌ある仁王像や籠岳山からの景色、個人ではなかなか見られない見龍廟などを見て、参加してよかったという感想をたくさんいただきました。

市内外には訪れてみたい文化財がたくさんあります。ぜひ友人や知人を誘っていろいろなまちの文化財や歴史に直に触れる機会を作ってみてはいかがでしょうか。

なお、今回訪れたのは次の場所です。

籠峯寺く黄金山神社く天平ろまん館く城山公園(涌谷神社、涌谷町立史料館)く見龍廟く美里町山神社



見龍廟での説明風景

今年も文化財保護普及の一環として文化財めぐりを開催する予定です。皆様の参加をお待ちしております。

岩沼市の文化財への
取り組み

生涯学習課では、文化財の保護と活用を図るため、次のような事業を行っています。

①岩沼市文化財保護委員会
教育委員会の諮問機関として、市文化財の指定及び解除並びに文化財の保存、活用について審議しています。

②文化財めぐりの開催と文化財だよりの発行
文化財に対する知識の向上と保護思想の啓発を目的に、文化財めぐりの開催と文化財だよりの発行をしています。

③発掘調査事業
埋蔵文化財包蔵地に係る工事等に対応するため、発掘調査等を行います。遺跡の記録保存に努めています。

④文化財出前講座
市内の文化財について、出土品や関係資料を使って、文化財専門員が分かりやすく説明しています。また、小中学校に文化財の貸出もしています。

⑤二木の松樹勢回復業務
市指定文化財の二木の松(武隈の松)の樹勢回復業務を毎年実施しています。

⑥文化財標柱設置事業
市内の埋蔵文化財包蔵地等に文化

財標柱を設置しています。
⑦文化財パトロール
市内の史跡・名勝・天然記念物及び埋蔵文化財包蔵地のパトロールを行い、県文化財保護課にその状況を報告しています。

文化財とは、我々の先人達が残してくれた貴重な文化遺産です。社会の急速な進展と各種の開発や生活の近代化が進み、破壊、滅失の危機にさらされている現状に鑑み、これら文化財を大切に保存し、後世に引き継いでいくことが我々にとって大きな責務となっています。

岩沼市教育委員会で、文化財に対して前述しました各種事業を通して、保護と活用に努めています。

岩沼市教育委員会
生涯学習課からのお知らせ

①埋蔵文化財包蔵地等に係る現状変更等について
埋蔵文化財包蔵地や隣接地、遺跡周辺で、地面を掘削したり、家やアパートを建てる工事を行う場合、計画の早い段階で生涯学習課に常備している遺跡地図によって開発予定地内における遺跡等の有無について照会してください。協議書の提出が必要な場合があります。

また工事等によって、地下から遺物等が出土した場合は、速やかに教育委員会までご連絡願います。

②寄附・寄贈ありがとうございます
これまでに、多くの方々から古文

書等の貴重な文化財の寄附・寄贈をいただいています。寄附・寄贈いただいた物件は、文化財の保護や普及啓発、市史編纂のために有効に活用させていただきます。

③文化財だよりをホームページに載せました
これまでに発行した文化財だよりを市ホームページ生涯学習課に掲載していますのでご覧ください。

④岩沼の古い写真をお貸しください
かつての岩沼の町並みや暮らしがわかる写真はありますか。例えば、漁業の様子や農作業の様子を写したものです。

貴重な文化財資料・市史編纂資料として、活用しますので、お持ちの方は是非ご連絡願います。
⑤新『岩沼市史』編纂事業
昨年四月にスタートした市史編纂室では、現在新しい『岩沼市史』をつくるために、岩沼市内に残されている歴史資料すべてを調査する歴史資料悉皆調査を進めています。また、随時歴史資料に関する記録保全活動も実施していますので気軽にご相談ください。

.....
文化財だより八号に関するご意見・ご感想をお待ちしております。
岩沼市教育委員会生涯学習課
文化財展示室(ハナトピア岩沼) 内線五七三
市史編纂室 二三一四七八七
メール 内線六一六
kyouiku@city.iwanumacity.sagi.jp